

これからの 幼児教育

2025 Spring

春

特集

学び合いで高める 保育者の専門性

課題提起

保育者の専門性の向上のために園がすべきこと

白梅学園大学 名誉学長 汐見稔幸

解説

保育者の専門性と研修のあり方

神戸大学大学院 教授 北野幸子

公開保育の取り組み事例

自治体 兵庫県神戸市

園 タンポポこども園（京都府・私営）

提言

学び合う園の風土づくりに向けて

和洋女子大学 教授 矢藤誠慈郎

調査結果紹介

子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査

愛知淑徳大学 教授 佐藤朝美

乳幼児の生活と育ちに関する調査

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。今号の特集テーマの核となる「保育者の専門性」の向 上は、前号で特集した「第4回幼児教育・保育についての基本調査」で、多くの園が「園の保育実践上、運営上の課題」として挙げた「保育者の資質の維持、向上」「管理職の指導力の向上」に資する視点から取り上げました。「保育者の専門性」とは具体的にどのようなものか、それを向上させる学びの機会を、限られた時間の中でどのように工夫してつくり出していけばよいかなどを考える際に、少しでもお役立ていただければ幸いです。

また、今号は後半に調査結果を2つご紹介しています。誌面に取り上げた内容はほんの一部で、調査報告書にはさまざまな関連データが掲載されています。ご興味をもたれた方は、ぜひ二次元コードなどから詳細をご覧ください。

「これからの幼児教育」編集部

STAFF

編集発行人／野澤雄樹 発行所／株式会社ベネッセコーポレーション
印刷製本／TOPPAN 株式会社 監修／北野幸子（神戸大学大学院教授）
企画・制作／ベネッセ教育総合研究所
編集協力／有限会社ベンダコ、丹羽三千代、菊池健（mananico）、神田有希子
執筆協力／二宮良太、有限会社ベンダコ 表紙・特集扉デザイン協力／へんな優
イラスト協力／中川視保子 撮影協力／菊池健（mananico）

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます。
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2025

今号の写真 [表紙 / 裏表紙 / 上]
◎タンポポこども園

CONTENTS

1 特集

学び合いで高める保育者の専門性

2 課題提起

日常的な語り合いで学び合いを促し
保育者の専門性の向上を
白梅学園大学 名誉学長 汐見稔幸

6 解説

保育者の専門性と研修のあり方
神戸大学大学院 教授 北野幸子（監修）

8 公開保育の取り組み事例

8 自治体 兵庫県神戸市
10 園 タンポポこども園（京都府・私営）

14 提言

変化を恐れず小さな試行錯誤を重ねて
保育者が学び合う風土をつくる
和洋女子大学 教授 矢藤誠慈郎

18 調査結果紹介 1

レジリエンスを育むための
保育者のかかわりを考える
解説／愛知淑徳大学 教授 佐藤朝美

20 調査結果紹介 2

乳幼児家庭における子どもと保護者の
デジタルメディアの使用実態
解説／ベネッセ教育総合研究所 高岡純子



学び合いで 高める 保育者の専門性

保育を取り巻く環境が変わりゆく中、子どもの幸せを保障するために、「保育者の専門性」の向上は園の運営にとって大きな課題です。

今号では「保育者の専門性」の向上が求められる背景、専門性を高める手段、保育者が学びに向き合う際の意識などを三人の識者が解説します。また、公開保育に焦点を当て、地域単位で専門性の向上に取り組む事例をご紹介します。

それらを通して、各園が具体的に取り組むヒントを考えていきます。





課題提起

日常的な語り合いで 学び合いを促し 保育者の専門性の向上を

2023年11～12月に行われた「第4回幼児教育・保育についての基本調査」^{*1}（以下、本調査）には、管理職を含めた保育者の資質・能力の維持、向上に課題を感じる保育現場の実態が表れています。本調査の監修者の1人である汐見稔幸先生は、園を取り巻く環境が大きく変わる今、保育者の専門性の向上が必要だと語ります。子どもの幸せな未来を形づくるサポートをするために、園はどのような専門性をいかにして高めていくべきか、お話をうかがいました。



白梅学園大学 名誉学長
東京大学 名誉教授
汐見稔幸先生（しおみ・としゆき）

東京大学大学院教授などを経て、2007年から2018年まで白梅学園大学・短期大学の学長を務める。現在は白梅学園大学名誉学長、東京大学名誉教授、日本保育学会理事（前会長）、一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事などを兼任。著書に『新時代の保育のキーワード：乳幼児の学びを未来につなぐ12講』（小学館）など。

× 園は、子どものウェルビーイング^{*2}を支える重要な担い手 ×

保育者の専門性の向上を支える環境が 十分に整っていない

社会環境の変化による保護者のニーズの多様化、特別な支援が必要な子どもへの対応など、保育現場は多くの課題に直面しています。また、コロナ禍を機に子どもが外で遊ぶ機会が減ったことで、自然の中で五感を使って過ごす経験が不足しがちになり、環境面でも子どもの育ちに変化が起きています。こうした課題を乗り越えるため、保育者には新たな知識やスキルを身につけて、専門性を高めることが求められています。

一方で、こうした保育者の成長を支える環境が十分に整っていない状況も見てきました。その背景の1つに、待機児童問題への対応として園の数を急速に増やしてきた施策の影響があります。園の数が増えるとその分だけ働き手が必要になるため、スキルや経験が十分でなくとも、園長や保

育者として働くを得ないケースが出てきます。それにより、各園の理念や方針がうまく引き継がれず、保育レベルの低下が起こりやすくなってしまうのです。

本来なら、国は保育の受け皿を増やすのと並行して、保育者の専門性の維持・向上を図る研修などを充実させるべきでしたが、必ずしも十分ではありませんでした。国の施策が整うには時間がかかりますから、園は自助努力により、保育者の専門性の維持・向上を図っていかなければならぬ状況にあります。

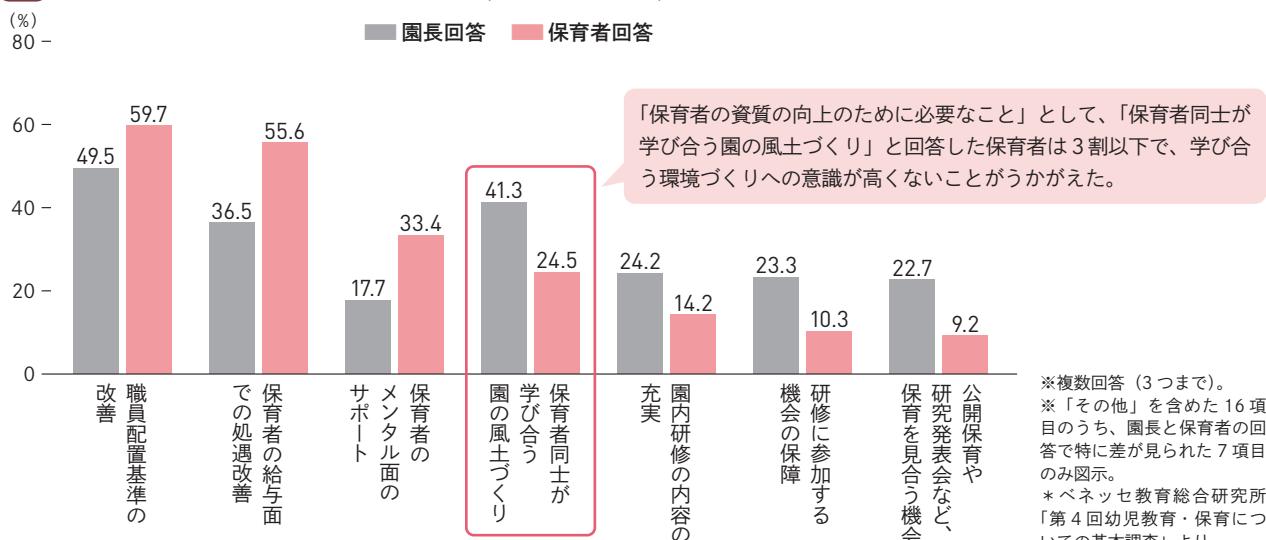
では、園はどうすればよいのでしょうか。私は、園内で「こういう保育をめざそう」といった理念を共有し、保育者同士が日常的に学び合う環境づくりが欠かせないと考えています。しかし、本調査の結果を見ると、「保育者同士が学び合う園の風土づくり」を重視すると回答した保育者の割合は、3割以下にとどまりました（図1）。

*1 「第4回幼児教育・保育についての基本調査」は右記のURLをご参照のこと。https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_240708-1.html

*2 身体的、精神的、社会的によい状態にあること。



図1 保育者の資質の向上のために必要なこと（全体 2023年）



保育者の専門性により 子どものウェルビーイングが向上する

そうした状況を踏まえ、園がすべきことを整理していきましょう。まず、園の存在意義を確認するために、こども家庭庁が提示した「はじめの100か月の育ちビジョン」*3を見てみましょう。これは母親が子どもを妊娠してから小学1年生までの約100か月間が、人生の基盤をつくる重要な時期になるという考え方のもと、子どもにかかる上で大切にしたい考え方をまとめたものです。

その中心には、ウェルビーイングという概念があります。人の幸せは、身体や心に加え、その人を取り巻く環境や社会の状況がよい状態であるときに感じられるという考え方です。子どもであれば、適切な食事や睡眠、遊びなどによって身体の健康が保たれ、精神的に安心・安全な状態にあります。自立が促されるサポートを受け、さらに家庭や園、地域の中で良好な関係性が築かれている、といった状態が想定されます。

園は、そうした子どものウェルビーイングを実現するための重要な担い手です。かつて日本には、家の近所に多くの遊び場があり、子どもたちは地域の人々に支えられながら、群れて遊ぶ中で育ちました。しかし、コロナ禍を経た現代では、子ども同士が安心して集団で遊べる場が失われつつあ

図2 幼児期までのこどもの育ちの5つのビジョン

- 1 こどもの権利と尊厳を守る
- 2 「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める
- 3 「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える
- 4 保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする
- 5 こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

*こども家庭庁「はじめの100か月の育ちビジョン」より。

ります。まさに園が唯一の場であるといつても過言ではありません。

このように、園には現代的な育ちの場を新たにつくり出すことが求められているのです。子どもたちが集団で遊ぶ中で、一人ひとりの特性に合わせて何を体験させるのか、どういった環境を用意するのか、どのように励ますのかなどを考えて具体化していくことで、子どものウェルビーイングは向上していきます。そうした営みを支えるのが保育者の専門性であり、その高まりによって園全体の保育の質が向上していきます。

保育を通していかにウェルビーイングを高めるかを具体的に考える際には、「はじめの100か月の育ちビジョン」の中の「幼児期までのこどもの育ちの5つのビジョン」が参考になります（図2）。どれも大切な考え方ですが、例えば2つめの「安心と挑戦の循環」は、保育の実践を見直す重要な手がかり

*3 こども家庭庁が2023年から2024年にかけて示した「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）」のこと。



りとなるでしょう（図3）。

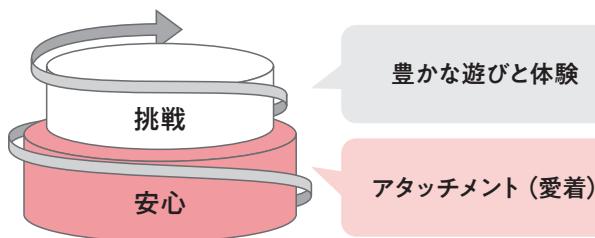
ここでいう安心とは、いわゆるアタッチメント（愛着）のことです。不安を感じたら必ずだれかが助けてくれるという安心感があると、失敗を怖がらずに挑戦して、豊かな遊びと体験を生み出していくことができます。

安心感は、子どもを管理するだけの保育では育

ちません。一人ひとりの言葉や表情から、「何が好きか」「これが怖いのか」といった思いを感じ取り、その子どもにふさわしい環境を丁寧につくることで高まっていきます。こうしたサポートは、保育者の重要な専門性の1つです。特に0～2歳児は言葉で思いを伝えることが難しいため、保育者には高い専門性が求められるでしょう。

図3 安心と挑戦の循環

乳幼児の育ちには「安心」と「挑戦」の繰り返しが大切



様々な人や自然・絵本などの環境と出会い、興味・関心に応じた「遊びと体験」をすることで、外の世界へ「挑戦」

子どもが不安なときなどに身近な大人が寄り添うことや、安心感をもたらす経験を繰り返すことが、「安心」という土台を築く

*こども家庭庁「はじめの100か月の育ちビジョン」より。



保育者同士の日常的な語り合いで専門性を磨く



3つの観点を意識して 日常的な語り合いを深める

保育者の専門性を高めるために、園ではどのようなことを心がけ、実践していくべきでしょうか。

保育の出発点は、子どもを「観察」することです。保育に限らず看護や介護など、あらゆる社会的実践は必ず観察から始まります。保育では、一人ひとりの子どもに相対しながら「この子はなぜ1人で遊びたがるのか」「このかかわり方でよいのか」「もっと違う環境があるかもしれない」など、毎日丁寧に観察して適切だと思われる支援をし、うまくいかなければさまざまなことを試します。そして、各園で自分たちの形をつくり上げていく保育は、試行錯誤の実践だといえるでしょう。

園が自分たちの形を見いだすためには、保育者同士の語り合いを日常化していくことが必要です。保育者が観察したことを持ち寄って語り合うことで、子ども理解はさらに深まります。これを「リフレクション」（内省）といい、日常的な園内研修

として大きな意味をもちます。

リフレクションでは、午睡の時間や園児の降園後などに時間をつくり、4～5人のグループでそれまでの保育を振り返って、「面白い姿が見られた」「こんなことに感心した」など、ポジティブなことを伝え合いましょう。他の保育者の言葉を聞くことで、「そんな捉え方もあるのか」など、子どもの見方が広がっていきます。その際、互いにアドバイスし合うことよりも、若手やベテランなどの立場を気にせずに、対等な視点で自由に語り合うことを大切にしてください。それぞれが口にした何げない気づきの中に、大切なことが潜んでいることも多いものです。時間が経つと印象的なこと以外は忘れてしまいやすいので、できるだけその日のうちに語り合いの場を設けるとよいでしょう。

リフレクションを通して子ども理解を深めたら、それをもとに、次にどのような体験や環境を提供するかを考えます。そのように子どもが発するさまざまな情報を受け取って取り組みを振り返り、その後の保育を検討することを「アセスメント」といいます。



図4 保育者同士の日常的な語り合いによる園内研修



子どもの言葉や表情などをじっくりと観察して、そこに込められた思いや考えを読み取る。子どもに共感する気持ちで観察することが大切。

保育者がグループになり、子どもの観察を通して気づいたことや感じたことを率直に語り合う。他の保育者の視点に触れて、子ども理解を深めていく。

リフレクションを通して子ども理解を深めた後は、次の保育で子どもに体験させたいことや必要な環境、声かけなどを検討する。

目の前の子どもたちに合わせて試行錯誤を積み重ねる保育には、決まった正解はありません。だからこそ、保育者同士の語り合いによる園内研修を習慣化し、観察、リフレクション、アセスメントを循環させて、園がめざす保育をつくり上げていく姿勢を大切にしてください（図4）。

そして、年1回は園の取り組みを長期的視点から振り返ることをお勧めします。「1年間の実践を通してどこが進歩したか」「来年は何をよくしたいか」など、実践内容だけでなくその意味や今後の展望を語り合うことで、園の理念はいっそう明確になり、保育者一人ひとりが取り組むべきことも見えてくるでしょう。

園の取り組みを振り返る際は、保育者の働く環境にも目を向けてください。「はじめの100か月の育ちビジョン」には、保育者を含む、保護者・養育者のウェルビーイングを高めることの大切さも述べられています。保育者同士が互いのありのままを認め合うことを通してウェルビーイングが高まり、自分を大切にできるようになれば、子どものよい面にも気づきやすくなるでしょう。保育者が安心して働き、新たな挑戦をしたくなる環境を整えることが、子どもの幸せな未来を形づくる保育につながっていくのです。

保育者の みなさんへの メッセージ

子ども・保育者のウェルビーイングを高めるため、園長先生が中心となり、悩みなどを含めて保育者が率直に語り合える風土をつくっていってほしいと思います。さらに保育者に求められる専門性の高さを外部に発信するためにも、地域のニーズに応えて、地域で不可欠な存在となることをめざしましょう。私自身も国や外部に対して、保育者の専門職としての地位を高める提言を続けていきます。

* 4 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携認定こども園教育・保育要領を指す。



解説

保育者の専門性と研修のあり方

少子化、共働き家庭の増加等に伴う保護者のニーズの多様化、特別な支援が必要な子どもの増加など、園を取り巻く環境が変化する中で、保育者にはこれまで以上に、専門性を高めることが求められています。しかし、保育者の専門性の中身を言葉にするのは、意外と難しいのではないかでしょうか。そもそも保育者とはどのような仕事なのか、保育者ならではの専門性とはどのようなものか、そして、その専門性はどのように維持し、高めていくことができるのか。「保育者の専門性」について改めて整理していきましょう。

記事監修 神戸大学大学院教授 北野幸子先生

保育者の専門性は「知識と技術」「実践力」

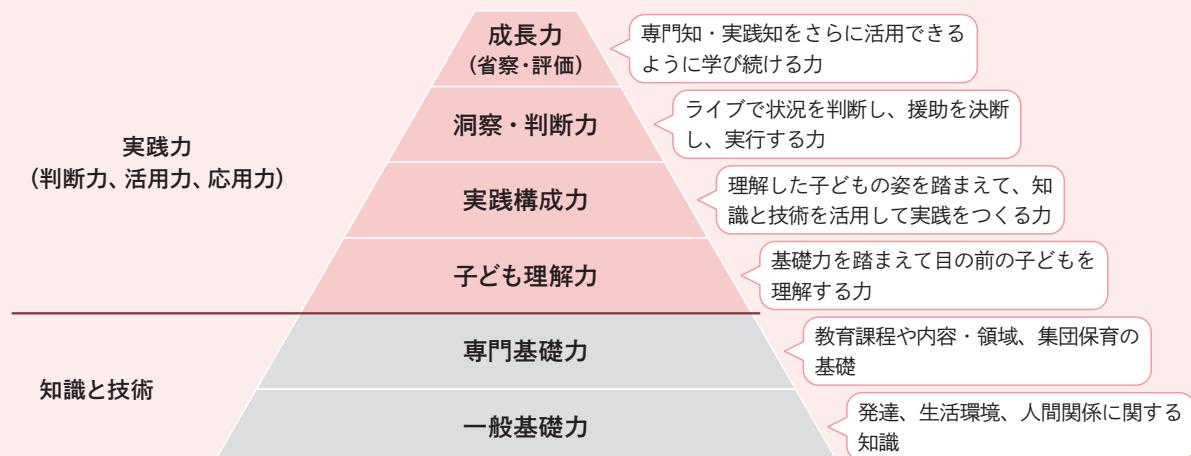
子どもを洞察するためには さまざまな力が求められる

保育の質の向上を図るために、保育者自身が保育の独自性と保育者の専門性について自覚することが大切です。小学校以降の学校教育とは異なる保育ならではの独自性は、1つは、「子どもから」という考え方を徹底し、個々の子どもの主体性を最大限尊重することです。そして、もう1つは、生活や遊びの文脈の中で自然に学びを培うこと、つまり、目的指向型や結果主義ではなく、プロセスを大切にした教育であることです。この2つが保育の独自性として重要であることは、保育者の先生方も日々実感されていることと思います。

子どもの主体性を尊重し、生活や遊びの中での育ちや学びのプロセスを支援するため、保育者には子どもの興味・関心を理解する力、子どもの発達の特徴を見取る力、子どもの育ちと学びを見通す力が求められます。個々の子どもを洞察し、理解の深化を図り、その育ちと学びを支えるのが、保育者の専門性です。

保育者の専門性は下の図のように整理できます(図1)。保育を支える土台として、一般基礎力と専門基礎力があります。一般基礎力は子どもの発達の特徴や、生活環境、人間関係の特徴などに関する知識や技術のこと、専門基礎力は要領・指針*、保育の5領域、集団保育の基礎などに関する知識や技術のことです。こうした知識や技術を土台と

図1 保育者の専門性



*北野先生の提供資料をもとに編集部で作成。

*幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。



した実践力とは、一般基礎力を活用して子どもを理解し、専門基礎力を活用して実践を具体的に構成し、ライブで判断し、決断していくことです。そして、自らの保育を振り返り、手応えのあった実践の特徴を把握し、自身の力として身につけたり、改善を図ったりして、成長へとつなげます。

保育者は、弁護士、医師、看護師、社会福祉士

などと同様に、人を対象にした、実践・臨床を伴う専門職です。対象が人、それも子どもであるため、個別性が強く、相互偶発性など不確定要素も少なくありません。ライブで展開する保育は、即決で判断を下さなければならないことの連続です。だからこそ、実践した自身の保育を常に振り返り、自らを高めていくことがとても重要です。

経験を言語化し、保育者同士で実践力を高める

子どもの事実を出発点に 自身の保育を振り返る

保育には「こうすれば必ずうまくいく」という決まったセオリーは存在しません。個々の子どもが異なり、常に変化しているからです。よって、ベテランの経験に頼るのではなく、若手・ベテランを問わず相互に語り合い、学び合う双方向的な研修が必要になります。

双方的な研修として有効なのが、他者への「公開保育」です。公開保育では同じ保育場面を見て、実践を基盤に保育を語り合う機会が得られます。ここでは、実践力の向上に役立つ振り返りが、1人ではなくほかの保育者との協働で深められます。

実施のしやすさでは「事例やドキュメンテーションを検討する研修」も、擬似的な公開保育として有効です。ドキュメンテーションは保護者の子ども理解を促す媒体として活用されますが、保育者がほかの保育者の実践から学んだり、互いに相談し合ったりするための媒体としても役立ちます。

多忙で園内研修の時間が確保しにくい場合は、「短時間の対話型研修」を行う方法もあります。1人3分以内で、その日園で実際にあった出来事に基づいて自身の保育を振り返ります。1回の研修の参加者を最大5人とすれば合計で15分、全員が話した後に自由に感想や気づきを10分程度語り合っても、30分もかかりません。「今日うれしかった出来事」「今日最も激しかったいざこざ」など、保育を振り返るテーマを決めてよいでしょう。

いずれの研修でも、保育を振り返る際には事実を出発点として語ることが大切です（図2）。振り返りの根拠を示すことで対話が深まります。さらに、その解釈を踏まえて、どのような環境の再構成や支援の工夫を行ったのかを保育者同士で言語化し、共有することで、子ども理解を踏まえた実践のあり方への認識が高まり、実践力の向上につながります。そして、対話を通して保育者同士が「もし私なら、このようなとき、こうするかも。なぜならば……」と、子ども理解に基づく実践のさまざまなあり方について語り合う中で、互いに選択肢を増やしていくことが期待できます。

保育者の仕事はマニュアル化が困難です。ライブで展開する保育においてとっさの判断の礎を築くために、自分やほかの保育者の保育を振り返り、語り合い、「なぜそうしたのか」「別の選択肢があるとしたら」と考える。そうすることで、保育者の専門性が高まっていくのです。

図2 保育を振り返るプロセス

①「子どもの事実」

子どもの会話、行動、表情などの事実を言語化する

②「保育者の解釈」

子どもの事実から見取った育ちや学びの評価を言語化する

③「解釈に至った理由」

子どもの育ちや学びにつながったと考えられる環境構成や保育者の援助などを言語化する

*北野先生の提供資料をもとに編集部で作成。



公開保育の取り組み事例

自治体 兵庫県神戸市

参加のハードルを下げる、 公・私、園種を超えた公開保育で 市全体の保育の質を高める

取り組みの ポイント

- 0～2歳児を対象とし、公・私の別や園種を超えてともに学び合う公開保育を実施。市内のすべての園の保育の質向上を図る。
- 保育を見学する視点や話し合いのポイントを明確に定めて、公開保育を通じた参加者全体の学びが深まるようにする。

❖ 子どもの姿を共有して対話を深め、保育者の専門性を高める ❖

公開保育実施園の負担を減らし 多くの園が参加できるしくみをつくる

9つの区を擁する神戸市こども家庭局では、各園の個性を尊重しつつ、要領・指針*に沿った保育を実施していくことをめざしています。そのため、公立保育所所長を市の課長級として待遇したり、保育経験者を職員として多数配置したりすることで、実態に合わせた施策を検討しています。

2018年には0～2歳児の保育の質の向上を図るため、神戸大学と共同研究を行う乳幼児保育研究部会を設置。自身も保育士や保育所所長を経験してきたこども家庭局の北林久仁子部長は、次のようにねらいを語ります。

「要領・指針で保育所が『幼児教育施設』と明記されたことを受け、国の方針と現場の実践をつなぐことが重要だと考えました。また、待機児童対策によって増加した園が、ともに学ぶ環境をつくりたいという思いもありました。3歳児以上の保育は各園が培ってきた特色や文化の違いが大きく、



お話ししてくださった方

神戸市 こども家庭局
北林久仁子部長

同じ土俵で語り合うことに難しさがあったので、まずは0～2歳児の保育に着目して質の向上を図り、土台を固めていきたいと考えたのです」

同部会の柱となる活動の1つが、0～2歳児を対象とした公開保育です。区ごとに4園からプロジェクト委員を選出し、同委員が中心となって各区の公開保育を計画、設営します。公・私を問わず小規模保育事業も含めた多くの園に実施を呼びかけており、毎年、各区から4園ずつが公開保育をするサイクルをつくりました。公・私幼稚園教諭の公開保育への参加も呼びかけるほか、オンライン会議ツールを活用して、離れた場所からも参加できるようにしています。

公開保育では、実施園の負担が増えないように

*幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。



図 公開保育当日の流れ

9:30	受付
9:40	オリエンテーション
10:00	公開保育見学
10:45	
	担任の振り返り
11:00	園への質問 グループワーク
12:00	全体会
12:30	終了



子どもの姿を通して、気づいた点を出し合って話し合いを深めます。実施園は、普段当たり前にしている実践が認められることで、その価値に気づくケースも多いといいます。実施後には、「新しい視点に気づけた」「同じ悩みをもつことを知つて共感した」などの感想が寄せられます。

工夫を凝らします。

「事前につくり込んだりせず、普段通りの保育を公開すればよいことを伝えています。指導案も、A4判1枚程度に当日の保育の流れや見てほしいポイント、保育者の願いなどを説明する簡潔なものにして、準備の負担を軽減しています」(北林部長)

リアルタイムの子どもの姿を通して 参加者・実施園ともに学びを深める

公開保育当日は、実施園が保育のポイントを伝えるオリエンテーションを行った後、45分間の保育見学に移ります(図)。参加者は「子どもの姿を中心に見る」という約束事に従い、保育のしかたや保育者の動きではなく、いつ、どの場面で子どもの心が動いたかなどを観察します。

見学後は担任が振り返りを伝え、付せん紙を使って意見を出し合うグループワークを実施。ここでは、①保育者のかかわりや環境構成などのよかつた点、②自分ならこうするという点、③質問事項の3つを中心に話し合います。

「『公開してよかったです』と思ってもらうためにも、よかつた点を認め合うことを大切にしています。ただ、1年目は参加のハードルを下げようと褒めることに終始したため、話し合いが深まりませんでした。そこで、翌年からは、自分ならこうするという点への意識を高めています。この観点は否定や批判のニュアンスが生じやすいため、参加者への注意を促しつつ、プロジェクト委員などが話

し合いに加わって、常に実施園をリスペクトした議論となるように配慮しています」(北林部長)

参加者が目の当たりにした子どもの姿を共有しながら話し合いを深め、さまざまな視点を取り入れて、参加者・実施園ともに専門性を高められることが公開保育の大きな利点です。

「少し気の弱そうな2歳児が、取られたおもちゃを返してと相手の子どもに必死に訴えていたとき、その手は大好きな保育者の手をしっかりと握りしめていました。その安心感があるからこそ、自分の意思を伝える挑戦ができたのでしょうか。参加者がそうした場面を目にすれば、座学で理論を学ぶよりもアタッチメントの大切さを実感できるはずです。このように子どもの心の動きをリアルタイムで捉え、みんなで共有すれば、参加者は理解を深め、同時に実施園の保育者も自身の専門性への自覚を深められます。まさに公開保育でしか得られない学びだと思います」(北林部長)

保育とは、子どもも環境も動き続け、ときに想定外の対応が必要になる中で、どう支えるとねらいに基づく子どもの育ちが実現できるかを考え続ける営みです。多くの保育者が異なる視点から意見を出し合うことで、学びは深まっていきます。

「たくさんの参加者の視点を自分の中に取り込み、保育の引き出しを増やしていくことが、個々の保育者の専門性を高めていきます。こうした保育者が集まってそれぞれの強みを生かせる環境が整うと、園としての専門性が高まり、保育の質を向上させるのだと考えています」(北林部長)



公開保育の取り組み事例

園 タンポポこども園（京都府・私営）

公開保育で他園と学び合い 保育者の専門性を高めて めざす保育を創り上げる

取り組みの ポイント

- 公開保育の実施にあたり、園の理念などを改めて話し合い、保育の方向性を共有。公開保育の参加者の意見や助言をもとに、実践を見直し続ける。
- 園内にとどまらず他園の公開保育を見学して、よい点を積極的に取り入れ、子ども主体の保育を充実させていく。

日常の保育を改善する学びの場として公開保育を実施

0～5歳児の各クラスが 主体性を重んじる保育を公開

京都府舞鶴市のタンポポこども園は海や里山が近接する地にあり、周囲の豊かな自然を生かしながら、子ども一人ひとりの主体性を重んじる保育を実践しています。もともと児童養護施設の一角にある子育て支援施設として出発した経緯があり、今も家庭的なぬくもりを感じられる園の風土づくりを大切にしています。

同園は2024年11月に公開保育を実施しました。舞鶴市では、市全体の保育の質を向上させる目的で、2013年度より公・私や園種などの違いを超えた公開保育を継続しており、同園での実施は今回で3回目になります。

公開保育の当日は、市内から保育者を始めとした幼児教育関係者約40人が集まりました。初めに1時間ほど0～5歳児の各クラスの公開保育を見学した後、担任による振り返りやグループワークなどを通して学びを深めました（図）。



園長
桑原町子先生



副園長
戸川政代先生



主任
行永恵子先生



主任
吉村亜希先生

各クラスの公開保育では、参加者は子どもの姿や遊びの様子を記録シートに書き取りながら見守りました。同園ではコーナー保育*の環境を整えて、子どもが興味をもったことに意欲的に取り組める支援を大切にしています。この日も、例えば4歳児クラスでは、自作のアクセサリーを身につけて

*さまざまな遊びのコーナーを作り、子どもが自分で選んだ場所で遊べるようにした保育のこと。



アイドルになりきり、ステージショーを楽しむグループや、友だち同士で意見を出し合って大きな紙に街を描く活動を楽しむグループなど、子どもが好きな遊びに生き生きと打ち込む姿が見られました。その横で保育者は、子どもたちに寄り添い、一人ひとりの表情や姿を注意深く観察しながら遊びを広げたり、深めたり、子ども同士をつなげたりする支援を行いました。

見学後に行われた担任による振り返りの冒頭では、園長の桑原町子先生が次のように話しました。

「公開保育に向けて保育者は何度も話し合い、子どもの姿を重ね合わせて保育環境を整えてきました。思い通りにならないこともあります、それでも保育の面白さだと改めて感じながら、チームとして保育の質を高めることをめざしています」

参加者の希望に応じたグループで各年齢の保育について語り合う

各担任が当日の保育について、自身の抱える課題も含めて振り返った後は、参加者が希望する年齢ごとに分かれて、約45分間のグループワークを実施。各グループは椅子を円形に並べて座り、全員のひざの上に直径1mほどの丸型の段ボールを置いて、その上の模造紙に意見を書き留めていきました。段ボールを脚のないテーブルとして使うことで、参加者間の身体的な距離がおのずと近づき、まさにひざを突き合わせた状態で、活発な話し合いが展開されました。

話し合いのテーマは、「保育者のどのような支援から気づきや学びを得たか」ということ。子どもの姿を通して語り合い、例えば、次のような発言が聞かれました。

- 子どもが歌を歌いたいと言ったとき、保育者がすぐに子どもと一緒にステージの準備を始めた支援が素敵でした。
- 街づくりは継続性のある遊びで、廊下に作品が置かれていて、興味をもった他年齢の子どもも参加しやすいと感じました。
- どの子どもも自分で遊びを選んでいる姿が印象的

公開保育の流れ

タンポポこども園が話し合いを重ねながら実践する、子ども主体の保育を公開。事前に、環境構成や予想される子どもの姿、保育者の支援と配慮などをまとめた指導案を配布しました。保育者をリスペクトする、参加者の穏やかなまなざしの中、公開保育が行われました。

①保育見学

当日の保育は、前日から続く遊びや活動が展開されていたため、子どもたちはとてもリラックスした様子。ときには見学者にも話しかけて、一緒に遊びを楽しもうとする姿が見られました。



②担任による振り返り

各年齢の担任の保育者が当日の保育を振り返りました。事前のねらいや、想定に対してどのような姿が見られたかや、自身の課題などを語り、その後のグループワークにつなげました。



③グループワーク

担任の保育者を囲む形で3~6人ほどのグループを構成。参加者一人ひとりの意見や感想をもとに、それぞれが印象的だったことなどを語り合って議論を深めました。



④総評

各年齢の実践や保育者に対して、神戸大学大学院の北野幸子先生による総評が行われました。

でした。

- 子どもに対しての言葉がけが、とても優しくて穏やかだと感じました。
- コーナー作りによって遊びが広がっていると思いました。

各グループでこうした意見が交わされる中で、「そんな意図があったんですね」「自分も試してみ



たい」「こういう場合はどうしますか?」など、話し合いもどんどん深まりました。

最後に、10年近くにわたり舞鶴市の保育研修のアドバイザーを務める神戸大学大学院の北野幸子先生が、各年齢の保育で気づいたことや担任の課題への助言を述べた上で、次にめざしたいビジョンを語りました。

「子どもたちのたくさんの笑顔の裏で、各クラスの先生方が子ども目線で『もっと楽しく、もっと

使いやすくするには』と深く考え、環境を構成していることがさまざまな場面から感じられました。保育者の専門性をさらに向上させるために、次のフェーズでは、『こんな姿が見られるかな』といった予測をはるかに超える子どもの姿が表れたとき、それを歓迎して楽しめる保育へと発展させていってほしいと思います。今日は素敵な保育の実践を公開してくださって、心より感謝しています」

✖ 他園との学び合いが、保育者を成長させる大きな力になる ✖

参加者の意見や助言が保育の再確認や自信につながる

同園では5年ほど前に、いわゆる設定（一斉）保育から子ども主体の保育へと、大きく舵を切りました。しかし、コロナ禍を挟んで思うように進まなかつた面もあり、今回の公開保育の実施にあたっては戸惑いもあったと、副園長の戸川政代先生は話します。

「職員の入れ替わりもあり、子ども主体の保育が十分に根づいていないと感じていたため、もう少し実践が整ってから公開したいと思いました。舞鶴市乳幼児教育センターのコーディネーターの方にその考えを伝えると、『だからこそ公開して、参加者から意見をもらうとよいのでは』と、背中を押される形で実施を決めました」

舞鶴市では、公開保育が日々の保育を見直すための通過点となるよう、入念に準備をした保育ではなく、ありのままの保育を公開することを推奨しています。同園でも基本的には日常の保育を公開する考えでしたが、「どのような子どもの姿を見てももらいたいか」「保育のねらいをどんな言葉で伝えるか」などを話し合う中で、子ども主体の保育について改めて見直す機会になり、環境構成をさまざまに試行錯誤しました。公開保育の前には乳児と幼児の保育者に分かれて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）の読み合わせをする研修も行ったといいます。

今回の公開保育を通して、たくさんの気づきがありました。保育者が自信を深める機会にもなったと、主任の行永恵子先生は話します。

「保育を変えていく過程では、自身が考えて行う保育に迷いが生じます。参加者の方々から多くのご意見をいただき、『このやり方で間違っていないようだ』『当たり前にやっていたけれど、すごいことなのか』などと自信や励みになったようです」

一方で、改善すべき点も多く見つかったといいます。

「室内でしっかりと遊び込めていた半面、子どもが自由に外遊びを選べる環境が十分に整っていなかつたというご指摘があり、その通りだと思いました。この先、子ども主体の保育を進めていく中で、見直しを図りたいと思います」（戸川先生）

他園の公開保育に参加して現場視点での気づきを持ち帰る

これまでも保育の実践を見直す際には、他園の公開保育が契機となり、大きな学びを得てきました。以前は桑原園長が見学することが多かったのですが、現在は現場の保育者が参加しています。

「園長の私が他園の実践を見学して『うちでも取り入れたいな』と思っても、園に帰り、日々懸命に子どもと向き合う先生方を見ると、説得力のある形で『ここを大きく変えましょう』とは伝えづらいと思っていました。そこで、先生方に参加し



廊下に広げた大きな紙に、自分の頭の中にある街のイメージを描き続ける様子。近くを通りかかった子どもが参加する場面も見られました。



手作りのマイクを持ち、ステージの上でノリノリで歌う子どもたち。保育者のサポートを受けつつ、あくまでも子どものアイデアを起点にした遊びが展開されていました。

てもらい、現場の視点から『これは取り入れられそう』といったアイデアを持ち帰って、提案してほしいと考えました」（桑原園長）

舞鶴市では公開保育を、参加した保育者が学んだ内容を園に持ち帰って共有し、実践に生かす「往還型研修」として位置づけています。同園でも職員会議や園内研修などの場で情報を共有し、「この実践がとてもよかったです、保育の中に取り入れられないか」と話し合い、保育の見直しに生かしてきました。主任の吉村亜希先生は次のように話します。

「保育を変え始めた当初は、『子ども主体の保育とは具体的にはどういうものだろう』というモヤモヤした気持ちがありました。そうした中、他園の実践を見ることで多くの気づきがあり、保育の見直しが進んでいきました」

物作りの遊びに使える多様な材料を用意して、子どもが自由に遊び取れる環境も、他園の実践を

部屋にはさまざまな材料が子どもの手が届く場所に用意されているため、子どもが「あれを作りたい」と思ったときに、すぐに遊びにつなげることができます。



参考にして整えました。また、以前はおやつの時間を一斉に取っていたため遊びが途切れましたが、今は子どもの好きなタイミングで取れるようにするなど、時間の使い方も一人ひとりの思いに合わせています。

子どもに対する声のかけ方も変わりました。

「次の活動に移りたい場面では、全員に聞こえるような大声で『さあ、片づけて』と指示をしていました。ところが、ある園では一人ひとりの遊びの様子を見ながら、『これが終わったら片づけようか』などと優しく語りかけていたのです。子どもの思いをとても大切にしていると感じ、取り入れるようにしました」（戸川先生）

子ども主体の保育が浸透するにつれ、保育者はいっそう保育を楽しめるようになったといいます。

「以前は次の活動の準備に追われていましたが、今は子どもの遊びを一緒に楽しむ気持ちになれたことが、大きな変化だと思います」（行永先生）

同園ではこれからも市内の園同士が学び合う環境を生かして、保育者の専門性を高め、保育の質の向上をめざしたいと考えています。

「保育の仕事はすぐに結果が見えるものではありません。それでも、人格の根っこをつくる大切な時期に子どもをお預かりしているという自信とプライドをもって、子どもや保護者に寄り添っていきたいと思います」（桑原園長）

幼保連携型
認定こども園
タンポポこども園

「子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくりだす力の基礎を培う」を理念に、子ども主体の保育を展開。2020年、認可保育所から幼保連携認定こども園に移行し、より多くの子どもを受け入れている。

○園長：桑原町子先生
○所在地：京都府舞鶴市泉源寺立田223
○園児数：93人



提 言

変化を恐れず 小さな試行錯誤を重ねて 保育者が学び合う 風土をつくる

生き生きとした子どもの姿が見られる園には、保育者同士も生き生きと学び合い、保育をよくしていこうとする風土があります。業務の忙しさや保育人材の多様化といった多くの課題がある中で、こうした風土をつくるには、どのような考え方で日々の保育や園内研修などを進めていけばよいのでしょうか。和洋女子大学の矢藤誠慈郎先生に、そのポイントをうかがいました。



和洋女子大学
人文学部こども発達学科 教授
矢藤誠慈郎先生
(やとう・せいじろう)

広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程中退（教育学修士）。ニューヨーク州立大学客員研究員、岡崎女子大学教授などを経て現職。全国保育士養成協議会常務理事、日本保育者養成教育学会理事などを務める。専門は、保育学、教育学。著書に、『園内研修を通じた保育の変革 A to Z』（フレーベル館）など。

✖ 「マインドセット」を見直し、変化への一歩を踏み出す ✖

保育に対する 正解志向を手放す

子どもは一人ひとりが異なり、日々変化、成長していきます。保育とは、そんな子どもたちの育ちを支える仕事です。保育では常に臨機応変な対応が求められますが、その対応がベストな選択だったかは、確かめるすべがありません。それでも、子どもにとっての最善を考え続けるために、園は変化を恐れず、自分たちの保育をつくり上げていく必要があると、私は考えています。

保育は園全体で組織的につくり上げていく必要がありますが、その取り組みは園ごとに幅があるのが現状です。また、保育者の離職や育成などの課題に対して、「このままではいけない」と危機意識を抱きながら課題解決に着手できていない園も少なくないようです。

取り組みが進まない園に共通するのは、考え方

の固定化——「マインドセット」です。例えば、「子どもが主体的に活動するのは難しい」「園内研修の時間が取れない」「人を育てるのは大変だ」といった考え方です。こうしたマインドセットが変化への一歩を妨げているケースをよく見聞きします。

背景には、変化による失敗を恐れる気持ちや、正解に向けて完璧をめざしたいという考え方があるようです。しかし、繰り返しになりますが、保育に正解はなく、何が正解かも確かめようがありません。だからこそ、できることから試してみて、自分たちの保育に小さなバージョンアップを重ねていくことが大切になります。いわば、小さな変化に開かれた組織をつくっていくのです。

例えば、一斉保育が中心の園であれば、それを続けながらでよいので、「次の発表会では何をしたいか、子どもにも意見を聞いてみよう」「劇のせりふの一部を子どもが考えるようにしよう」といった、小さな変化を取り入れていきます。一気に保



育を変えようとするのではなく、今の状況が少しよくなる取り組みを積み重ねるという考え方へ変えていくのです。それが結果的に子どもの力に気づくことになり、保育の変化につながります。もちろん試したことが必ずしも成功するとは限りませんが、そのときは引き返せばよいのです。「3歩進んで2歩下がっても1歩前に出ていればよい」といった気持ちで進めていきましょう。

日常的に価値や理念を伝え 園全体で志を共有する

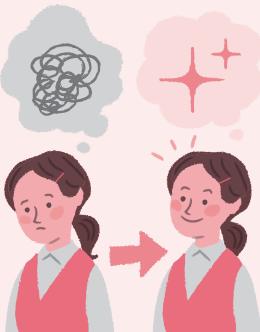
成果を数値で表しにくい保育の仕事で変化を生み出すには、「子どものために」という保育本来の志を共有して保育者のモチベーションを上げることが必要です。「子どものために」と考えるのか、「先輩に怒られないように」と考えるのかでは、意

識や行動に大きな違いが生まれます。

園全体で志を共有するには、日頃から園長先生やリーダーの先生が「園が大切にしている価値や理念は何か」「子どものために何をすべきか」といったことを繰り返し伝えていくことが大切です。個々の保育者には保育観や子ども観に違いがあるかもしれませんのが、保育の専門家としての保育者には、原則として国が定めた要領・指針*に基づく保育が求められます。保育や行事などに関する話し合いの場では、常に「子どもが主役」というメッセージを発信し、「要領・指針に示されている子どもの姿を引き出せているか」「自分たちの保育は子どもにどのような影響を与えているか」という視点に沿って意見を交わせるようにしていきましょう。その結果、自然と園全体の志が高まり、保育者にも自分を高めようとする姿勢が生まれて、専門家としての意識で取り組むようになります。

こんな マインドセットを 見直そう!

変化を試みようとしても、さまざまなマインドセットによって最初の一歩を踏み出せないことがあります。保育者の専門性をより向上させるために、まずはこうした思い込みがないか、柔軟な発想で振り返ってみましょう。



✗ 保育の「正解」を教えてほしい

保育には正解は存在しません。だれかが絶対的な答えをもっていて、それを学べば保育を一気に改善できるということもないのです。だからこそ、試行錯誤を重ねながら暫定的な答えをつくり出し、それを少しづつバージョンアップさせていくことが求められます。

✗ 園を改革するのは難しい

いきなり大きな改革をめざすのではなく、スマールステップで1つずつ進めていきましょう。まずは、やりやすいところからでかまいません。何かを変えることで生じる結果を感度よくキャッチし、必要に応じて工夫しながらあきらめずに進めていけば、必ずよい結果が得られます。そして、それがさらによい結果をもたらす起点となるはずです。

✗ 全員で研修をするのは難しい

全員が一堂に会した研修が必要なのかを検討した上で、数人ずつのグループによる研修でも目的を果たせるのではないかなど、代替できる工夫を考えましょう。難しいからやらないのではなく、目的を実現できる方法を考えて、試してみることが重要です。もしうまくいかなくても、別な方法に変えればよいのです。

✗ 園内の人間関係が悪いから保育もうまくいかない

保育者に限らず、性格や考え方が合う・合わないはよくあることです。そこにこだわるのではなく、学び合う同僚として尊重し合える関係づくりができれば、保育をする上で支障はありません。それが同僚性であり、園内研修などの工夫により十分に実現できることです。

✗ 先輩保育者は雲の上の存在だ

先輩保育者が多くの知識や経験をもっているのは確かですが、それを若手に下ろしていくといった考え方は、組織全体の成長を妨げる要因になることがあります。先輩・後輩の別なく保育者同士が悩みを含めて語り合える関係を築くことで、後輩は先輩を自分と地続きの存在として捉えられるようになり、さらに学び合いが促されるという好循環が生まれます。

* 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携認定こども園教育・保育要領を指す。



＊ 園内研修の変化を足がかりに、園全体の課題解決を図る ＊

視点や考え方を共有する園内研修で保育者同士の学びを深める

保育者の専門性を高めるとともに、保育者同士が学び合える風土をつくり、園全体の質を高めていく手段として、園内研修は大きな意味をもちます。園内研修における変化を足がかりにして、園の課題がすべてよい方向に循環していく事例を、私はアドバイザーとしてかかわる中で数多く経験してきました。

園内研修をよりよく変えていくきっかけとして始めやすいのが、意見交換を活発化するという目的のもと、園内研修を全員が均等に発言できるものにすることです。例えば、物事を深めようとするときのことを考えてみてください。1人で考えていると時間も労力もかかりますが、複数人が意見を持ち寄り、話し合いをすれば、短時間で多くの視点や考え方につなげることができます。一方向からの視点では立体も平面にしか見えませんが、多方向からの視点が加わることで、高さや別の面に気づくのと同じことです。つまり、場の雰囲気などに配慮してだれかと同じことを言うよりも、自分の視点や考え方に基づいて、できるだけ違うことを言ったほうが多角的な学びになるのです。それを研修時に行えば、その場にいる全員がさまざまな視点や考え方を共有して学びを深め、園全体の質の向上につなげることができます。

そこでは若手もベテランも関係ありません。若手は新しい教育を学んできた分、若手なりの視点

や考え方をもっているからです。「先輩が後輩を教えるものだ」というマインドセットを手放し、一人ひとりを尊重して、だれもが意見を出しやすい園内研修をめざしていただきたいと思います。

1人が長く話しそぎて場を支配することがないように、「1人〇分ずつ話す」などのルールを決めるといいでしょう。砂時計を用意したり、人と違う意見が歓迎されるようなルールを加えたりして楽しめるようにすれば、最初はうまく話せなくても、次第に慣れて多くの意見が出るようになり、話し合いの内容も深まっていきます。

話し合いの場では、全員が発言者の話に耳を傾けることも重要です。決して否定せず、うなずいたり穏やかな表情で受け止めたりする姿勢があると、だれもが安心して発言しやすい雰囲気が生まれます。不機嫌な顔をして周囲に気を遣わせないよう、気持ちのよい場づくりを心がけてください。

くじ引きなどにより、普段は接点の少ない保育者同士でグループを構成し、子どもの姿を共有する方法もお勧めです。ときどきグループをシャッフルしながら取り組みを続けることで、園全体に保育者同士のつながりが緩やかに広がり、互いに話をする機会が増えていきます。担当以外の子どもへの理解が深まるとともに、保育者間の相互理解も進み、一人ひとりが「この園は自分の居場所だ」と感じられる組織へと育つでしょう。

「忙しくて研修を実施できない」「全員が集まるのは難しい」といった悩みもよく耳にします。しかし、「時間がないからやらない」ではなく、「毎日5分だけでもやる」「全員でなくても少人数ずつのグループでやる」といった柔軟な考え方をもつことが大切です。忙しさなどを理由に研修を実施しないでいると、保育者は相談できずに孤立し、精神的な負担も増していきます。一方で、短時間でも保育者同士が語り合えれば、心にゆとりが生まれます。その結果、忙しい状況は変わらなくても、保育者に一人ひとりの子どもを受け止める気持ちの余裕が生まれることが期待できます。





公開保育で園外の視点を取り入れ 強みの伸長と課題の解決に生かす

園外の参加者と多様な視点や考え方を学び合える公開保育も、効果的な研修の1つです。

公開保育では、実施園が自園の強みを知ることができるように、園のよさを探すことに徹する形式を採用するとよいでしょう。そして、グループワークの際などに、参加者が積極的に園の保育のよい点を伝えていきます。できていないことを探すのと比べると、よい点を見つけるのは意外と難しいものです。よい点を的確に言葉にするには、よい保育をわかっている必要があるからです。

実施園では、参加者からよい点を認められることで、自分たちの実践にさまざまな価値があることに気づき、それが自分たちの強みを意識的に伸ばす力へつながります。同時に、課題に気づく機会にもなります。以前、公開保育を実施したある園の先生は「子どもとのかかわりがよいと褒められた一方で、環境構成についての言及がなかつたので、次回までに改善したい」と話していました。課題ばかりを指摘されると自分たちを守りたいという気持ちが芽生え、「そうは言っても事情がある」といった反論につながりがちです。まずよい点が認められることで安心感が生まれ、自分たちの課題にも目を向けられるようになります。

参加者もまた、公開保育で気づいた実施園のよい点を、自園に取り入れる工夫を考えていきましょう。それが、変化のきっかけになるはずです。

保育者の みなさんへの メッセージ

教育の本質は、人が自ら育とうとする力を信じ、支えることにあると考えています。この考え方には、子どもに対する保育だけでなく、保育者の育成にもあてられます。「子どもはこんなに育つのだ」「保育者がこう変わってくれた」「自分も少しは成長できた」と感じられたとき、先生方は人を育てる専門家として、大きな喜びを感じるのではないでしょうか。一度芽吹いた成長は、本人の喜びがモチベーションになり、さらに豊かになっていきます。こうした教育の本質を見据えながら、子ども・保育者に加えて自分自身の成長も温かく支え、また、楽しんでいただきたいと思います。

話し合いで終わらせず 気づきをもとに具体的な行動に移す

園内研修や公開保育などで得た気づきをもとに園を変えていくには、具体的な行動に移すことが欠かせません。その際は、だれかが自発的に始めるのを待つのではなく、話し合いの段階で「これを試そう」と具体的に決めることが大切です。

さらに、1か月後など一定期間が経過した後に試行錯誤の結果を報告し合う場を設けます。例えば、「このコーナーを変えたら遊びがこう変わった」「環境を変えたら子ども同士がぶつかることが増えたので元に戻した」といった体験を共有するのです。このように小さな実験を繰り返して、よい実践を全体に広げていきます。こうしたプロセスにより、単に「子どもの姿を共有する」だけではなく、具体的な実践につながる研修となります。

このように、試すべき何かを見つける上で園内研修や公開保育は非常に有効です。日々の保育にみんなで考えた何かを試してはその結果を確かめ、必要に応じて改善を加えていくというプロセスを組み込むことで、園は変化していくことができます。変化の過程で自分たちの保育がよくなっている実感をもてれば、保育者同士も互いのやり方を尊重できるようになり、園の課題の解消にも一歩ずつつながっていくでしょう。そして、互いを認め合いみんなで学び合おうとする風土ができれば、保育者の専門性はおのずと高まっていくと、私は考えています。

「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査」より

レジリエンスを育むための保育者のかかわりを考える

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) ではアジア 8 か国・地域の研究者と連携し、2023 年から 2024 年にかけて、子どもの「レジリエンス（困難な状況に適応して立ち直る力）」の育成がどのように行われているかを明らかにするために、保育者を対象としたインタビュー調査を実施しました。そのうち、日本の保育実践に関する調査を担当した佐藤朝美先生に、レジリエンスとは何か、園でどのように育めばよいかをうかがいました。



佐藤朝美先生 (さとう・ともみ)

愛知淑徳大学人間情報学部教授。東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。東京大学大学院情報学環助教を経て現職。教育工学、幼児教育、家族内コミュニケーション、学習環境デザインにかかる研究に従事。日本子ども学会（理事・編集委員長）。著書に『物語行為の支援システム—親子の活動に着目して』（晃洋書房）など。

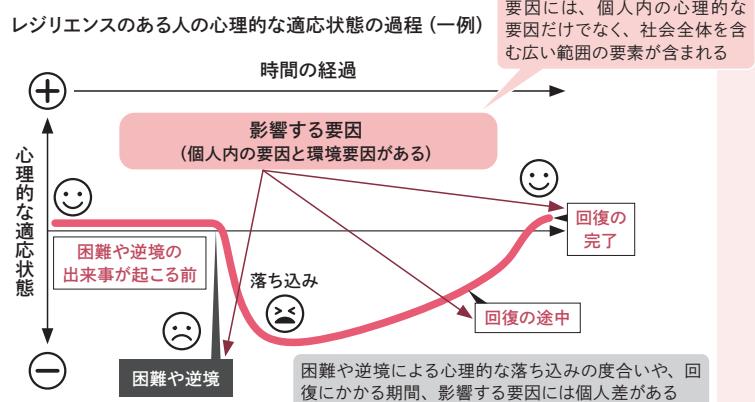
幼児期は、困難や逆境から回復するレジリエンスを育むチャンス

人は、困難や逆境に直面すると、心理的に落ち込むものです。しかし多くの場合は、時間の経過とともに落ち込んだ状況から徐々に回復していきます（図1）。こうした困難や逆境から回復していく力をレジリエンスと呼び、コロナ禍を機に世界的に注目されるようになりました。

レジリエンスが発揮できるか否かは、個人の生まれもつ資質による面もありますが、対人関係などの環境的な支えも影響すると考えられています。困難や逆境に対して我慢することを求めるのではなく、子ども自身がどうしたいかを考えて次の見通しをもてるよう支援をすることで、レジリエンスは育まれていきます。特に幼児期は、子ども一人ひとりがやりたいことに没頭するからこそ、理想と現実のギャップや他者との衝突など、さまざまな困難や逆境が同時に多発的に生じます。レジリエンスを育むチャンスにあふれていると同時に、園の存在が大変重要ななるともいえるでしょう。

実際、今回の調査で園の先生方にレジリエンスの育成についてインタビューしたところ、「子どもたちに挑戦したいと思える活動を提供し、それを克服する体験を促している」「保育者からの肯定的な言葉がけや、友だちとの学び合いや支え合いを通じて、子どもたちが自信をもち、困難に立ち向かう力を育んでいる」など、日々の園生活で子どもたちにレジリエンスを育むための配慮をしているという声を数多く聞くことができました。

図1 レジリエンスの概念



※小塩真司、平野真理、上野雄己編（2021）『レジリエンスの心理学』（金子書房）による概念図をもとに編集部で作成。

「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査 2024」調査概要

調査の実施者：チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

調査のテーマ：子どものレジリエンスをどう育むか～アジア諸国の保育者の実践から考える～

調査対象：アジア 8か国・地域（日本、中国、フィリピン、マレーシア、台湾、インドネシア、シンガポール、タイ）。予備調査：園長、主任保育者（各4～8人、計 45 人）主調査：主に4～6歳の幼児を担当する保育者（各国約 10 人、計 82 人）

調査時期：2023 年 9 月～2024 年 2 月

調査方法：インタビュー調査

調査項目：「レジリエンス」「社会情動的スキル」の用語の認知・解釈／園における「レジリエンス」「社会情動的スキル」を育む実践・活動の実施状況など

<https://www.blog.crn.or.jp/crna-research-activities.html>

調査内容を詳しく知りたい方は、こちらからアクセスしてください。▶▶▶

ページの下部の日本のカントリー・レポートをご参照いただけます。



レジリエンスを育むために保育者にできること

園の先生方へのインタビューなどを通して、レジリエンスが保育実践の中で育まれるプロセスを整理したのが **図2** です。

子どもたちが困難や逆境を感じるのは、理想と現実のギャップを認識したときが多いと園の先生方は捉えています。「上手にできない」「友だちが遊んでくれない」など子どもたちが感じたモヤモヤの中には、すぐに解決できないものもあります。そうした中で自分の感情を理解し、簡単に解決できないことにもじっくり向き合ったり、ときにはやり過ごしたりしながら、解決策を模索します。その過程で、周囲の保育者や友だちの助けを得ることも大きな支えになります。そして、少しづつ状況を改善し、「こうすればできた」という成功体験を積み重ねることで、子ども自身が困難や逆境からの回復の見通しをもてるようになっていきます。

困難や逆境から回復しようとする子どもに寄り添う保育者のあり方として共通するのは、まず子どもの気持ちを受け入れることです。子どもが自分の気持ちを表現できるように支援し、どのように

な感情も受け止めます。その上で他者とのトラブルがある場合には、相手の気持ちを整理し、理解できるよう促すことが求められます。そして、異なる考えを尊重しながら自分の理想を実現していくことを支援します。その際、保育者や友だちに相談したり、頼ったりできる環境を準備することも大切ですが、最終的には子どもが独り立ちできるよう支援していくことが目標になります。

ベテランの先生からは、年長児を中心に子ども同士のトラブルを可能な範囲でクラス内に共有し、当事者の気持ちを理解しながらみんなで解決策を考えるという実践もうかがいました。このような取り組みを通じて、当事者以外の子どもたちにも考える姿勢が身につき、解決策の引き出しが増え、レジリエンスが育まれるということでした。

レジリエンスを育むためのかかわりは、時間がかかることも少なくありません。そのため、園の先生方が心に余裕をもって子どもに寄り添える環境を整えることも、レジリエンスの育成においてとても重要であると考えています。

図2 レジリエンスを高めるための保育実践

子どもの新しい状況への挑戦のステップ

理想と現実のギャップを認識する



自分自身に負荷をかけすぎない



先生や友だちのサポートを得る



できたことを喜び、自分を肯定する

保育者の受け止めのステップ

子どもの気持ちを受け入れる



子どもが自分の気持ちを表現できるようにサポートする



子どもが他者の気持ちを理解できるようにサポートする



異なる考えを尊重する



子どもの成功や成長を促進する

「乳幼児の生活と育ちに関する調査」より

乳幼児家庭における子どもと保護者のデジタルメディアの使用実態

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、共同でプロジェクトを立ち上げ、乳幼児の生活や発達についての縦断的な研究を行っています。今号では、2016年度に生まれた子どもをもつ保護者に対して毎年1度、継続的に調査する「乳幼児の生活と育ちに関する調査」から、デジタルメディアに関する結果を抜粋してご紹介します。

デジタルメディアを使用させる理由の1位は「子どもが使いたがるから」

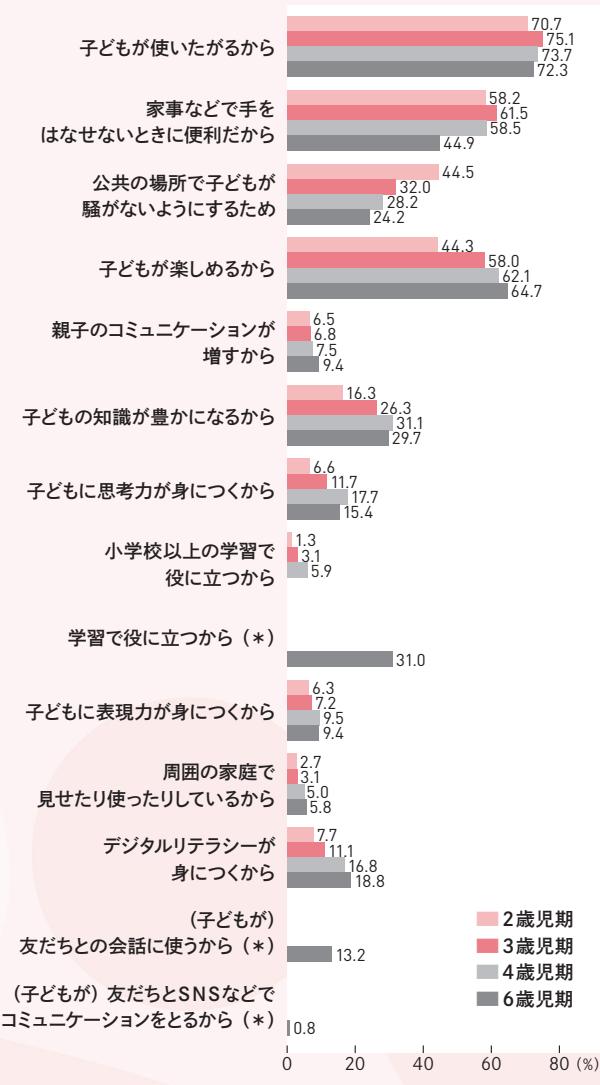
本調査では、2歳から6歳までの期間で、乳幼児がデジタルメディア（スマートフォン、タブレット端末）にどのようにかかわり、保護者自身も含めてどのような使い方をしているかについて聞いています。

図1は、デジタルメディアを子どもに使用させる理由について、2歳、3歳、4歳、6歳の各時点での保護者に聞いたものです。もっとも多かったのは、すべての年齢で「子どもが使いたがるから」でした。一方で、年齢が上がるにつれて割合が減少する項目は「家事などで手をはなせないときに便利だから」「公共の場所で子どもが騒がないようになるため」でした。子どもの年齢が低いほど、保護者が忙しいときや、公共の場などでふるまいに気をつけたいときに、デジタルメディアを活用している様子がうかがえます。

また、年齢が上がるにつれて割合が増加する項目は「子どもが楽しめるから」「子どもの知識が豊かになるから」「デジタルリテラシーが身につくから」などでした。子どもを楽しませるとともに、デジタルメディアを通して知識やリテラシーを徐々に身につけていってほしいという保護者の願いが表れている様子がうかがえます。

このように、保護者がデジタルメディアを使用させる理由は、子どもの年齢に応じて変化していく様子がわかります。

図1 デジタルメディアを子どもに使用させる理由



※複数回答。※（*）印は6歳児期のみでたずねた項目。
※5歳児期は質問の形態が異なるため、掲載していない。

「乳幼児の生活と育ちに関する調査（2017-2023）」調査概要

目的：2016年度に生まれた子をもつ保護者に、年1回の追跡調査を行うことで、子どもの生活や発達と保護者の子育ての変化を知り、よりよい子育て支援を考える。

調査時期：2017年9月～10月（子どもの年齢：0歳6か月～1歳5か月）から毎年9月～10月に実施

調査対象：2016年4月2日～2017年4月1生まれの子どもをもつ家庭3,205世帯（調査モニター）
＊ここでは0歳～6歳まですべてに回答した母親1,402人、
父親1,024人が対象

https://benesse.jp/berd/jisedai/research/pdf/2017_2023_Nyuyouji.pdf
調査内容を詳しく知りたい方は、こちらからアクセスしてください。▶▶▶



データ解説



ベネッセ教育総合研究所

調査研究室 主席研究員

高岡純子 たかおか・じゅんこ

乳幼児領域を中心に、子ども・保護者・園を対象とした調査研究、乳幼児とメディアの研究などに携わる。

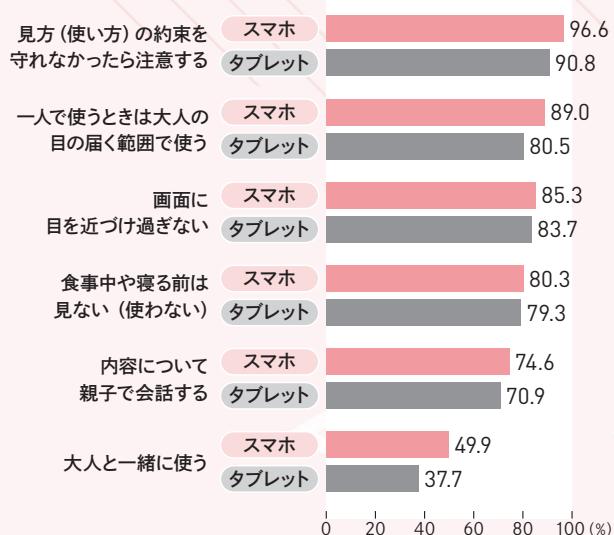
スマートフォンとタブレット端末では、使用ルールに異なる傾向も

6歳児をもつ保護者にスマートフォンとタブレット端末の使用ルールについて聞いたものが図2です。「見方（使い方）の約束を守れなかったら注意する」「一人で使うときは大人の目の届く範囲で使う」など、多くの項目で肯定的な回答（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」）が8～9割を占めました。約束を守ることや大人の目の届く範囲での使用以外にも、身体面、生活面での影響などに配慮して使用させている様子がうかがえます。また、すべての項目でスマートフォンのほうがタブレット端末より、ルールを設定している割合が高くなりました。特に差が大きい項目は「大人と一緒に使う」で、大人と一緒に使われやすいスマートフォンに比べると、タブレット端末は子どもだけで使うことが多いようです。

図3は、保護者のデジタルメディアの使用について聞いたものです。「子どもと顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」「子どもを遊ばせているときに、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」ことが「1日に数回程度」以上という回答が、いずれも2～3割でした。

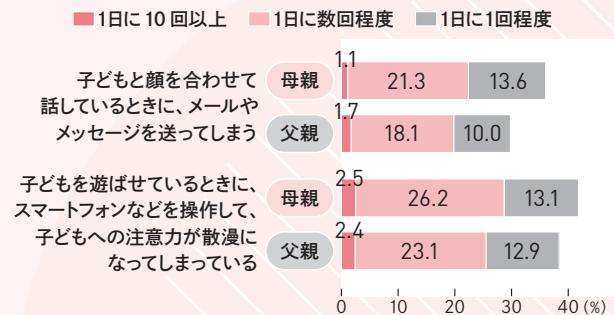
保護者がデジタルメディアを使用することで親子のコミュニケーションが阻害され、子どもの生活や発達に悪影響が生じる可能性があることを「テクノフェレンス」といい、注目されています。テクノフェレンスの状況に陥らないためにも、子どものデジタルメディアの使用ルールを親子で確認するとともに、保護者自身のデジタルメディアの

図2 デジタルメディアの使用ルール



※数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。
※6歳児をもつ保護者のみの回答。

図3 保護者自身のデジタルメディアの使い方



※数値は「1日に10回以上」「1日に数回程度」「1日に1回程度」を抜粋して掲載。

使い方が、子どものコミュニケーションにどのように影響しているかを振り返ることが必要です。ぜひ園からも保護者にお伝えいただき、保護者自身の気づきにつなげていただければと思います。

刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報を届けます。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの中保育」バックナンバー

2024(秋) | 特集 | 全国調査から見えてくる 保育の課題と未来へのヒント

2024(春) | 特集 | 組織で積み上げる 園と保護者のコミュニケーション

2023(冬) | 特集 | 保育者のメンタルヘルスを考える

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードいただけます。

ベネッセ これからの中保育

検索

<https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/>

「これからの中保育」お問い合わせ窓口

〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17 TEL.0120-926-610(通話料無料) 受付時間／9:00~18:00(土日・祝日・年末年始除く)
※番号をよくお確かめのうえ、おかげください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかげください(ただし通話料がかかります)。